

## 新井白石 シドッティを尋問し大に見地を広げる 奥 正敬

江戸時代中期の1708（宝永5）年、徳川幕府の対外政策とキリスト教政策に絡む大きな問題が起こった。当時の鎖国令を破って一人のイタリア人が大隅の国（現在の鹿児島県）の屋久島へ上陸したのである。この人物、イエズス会宣教師で名をジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティ（Giovanni Battista Sidotti 1668-1714）といい、布教を目的としたローマ法王の使節として日本に潜入したものである。

このシドッティの来日については、我が国で早くから研究が進められ、既に多くの書物が刊行されている。これらを総合すると、彼は上陸に際し月代（額から頭の中ほどまで頭髪を剃った部分）を剃りあげ、羽織袴で大小の日本刀を帯びた姿であったという。また、屋久島島民の通報によって捕らわれの身となり、長崎で通詞に尋問を受け、その結果は直ちに江戸の幕府に届けられたことなど、多くの事実が明らかになっている。

### 見識の高いシドッティ

シドッティはイタリアのパレルモで貴族の子として生まれ、ローマで広い学識を積むと共にキリスト教義の勉強を重ね、若くして要職も歴任したようである。鎖国令が敷かれたこの時期のイエズス会からの日本への使節派遣は、枢機卿会議でシナやシャムの禁教が解除されたとする情報の中で、日本でも同様の措置がとられたとする誤報、もしくは推測に基づいてのものであったとされている。彼はこの決定に従いローマからフランスを経て、同国の船でフィリッピンのマニラに到着し、この地で4年間にわたって病院の建設や学校の創設に尽力した。このような活動の傍ら、同地に滞在する日本人漂流民に接触して日本国内で禁教が継続されている事実を知り、また彼らから日本語も学んでいたという。さらに、屋久島への到達にはスペインのフィリッピン総督の支援を受けていたとされている。

### 安定した国内状況と新井白石の登場

時あたかも、徳川幕府は5代将軍綱吉が逝去し、6代将軍として家宣がその地位に就いたばかりであった。将軍の交代期とはいえ、既に幕府成立から100年が過ぎ、鎖国体制が整って約60年が経過しており、国内状況は安定した時期であった。また、人々は元禄年間（1688—1704）からの繁栄した文化を享受してきており、キリスト教に対する過剰な反応も落ち着きを見せてきた時代であったように思われる。

こうした背景の中、儒学者で新将軍の前職（甲府領主）以来の補佐役を経て、幕府の寄合儒員となった新井白石（1657-1725）は、家宣の許可を得てシドッティを長崎から江戸へ送致させ、自ら取り調べに臨むこととなった。白石はシドッティを収容した小石川宗門改所（キリシタン屋敷）へ4度にわたって足をはこび、日本潜入の目的や海外の最新情報を聴取したのである。

### 優れた世界地理書『采覧異言』の作成

その内容は白石が記した『西洋紀聞』や『采覧異言』に纏められた。特に、後者の『采覧異言』は、「万国の異なる言を採ってこれを見る」という意味で、「我が国で初めての体系付けられた世界地理書」と言われている。



延享5（1748）年の写本『采覧異言』（左奥）と明治14（1881）年になって印行された『采覧異言』（いずれも本学図書館所蔵）

この芳しい評価は、中国において宣教師活動を行ったイタリア人マテオ・リッチ（1552-1610）作成の『坤輿万国全図』をはじめとして、オランダ製の地図を豊富に使っていること、またシドッティを尋問して得た知識を、彼が宗教的理由から嫌悪感を示していたオランダ人に確認しながら著した信憑性の高いものであること、さらに総論で天動説を説明しながら、ヨーロッパ、